

# 英語を武器にできる日本人

右手に専門分野を持ち、左手に英語を持つ人材が21世紀に勝つ。

DESTINATION

英語は伝達道具にすぎない。

しかし道具であるがゆえに、常に磨いておかなければいけない。

日本の子供達に英語を使えるようになってほしい、それも、ただ単に英語が好きな子供を育てるのではなく、自分の専門分野を持ち、英語を武器にして世界にはばたく人材を育てたいという大きな夢が私にはありました。そのためには、従来の英語教育だけではなく、英語を使って自己を表現することができ、異文化を持つ相手とコミュニケーションをとれる人材を育てることが大切です。つまり、「自分の考えを持ち、その考えを言語を使って表出することができ、相手の中にある異文化を受け入れながらも互いに共存できる子供達」の育成です。

今まで数々の学会、ワークショップに出席し、勉強させていただきました。そこにある実践授業やゲームなどは、楽しいもの、子供の年齢に合ったもの、定着の良いもの…とそれぞれすばらしいものがありました。すべてカリキュラムの中にある「点」の活動であり、それが連なってどんな「線」を描くのか、またその線が何を目指してどこに到達(destination)するのかが非常に曖昧でした。次の日のレッスンにはとりあえず役に立つけれど、それだけで良いのだろうかという、もやもやしたものが常に心の中に残ったのです。

一方で、「児童英語教育と中学英語をどう結びつけるか」等の議論がさかんにおこなわれていますが、冒頭に示したとおり、自分の専門分野を持ち、英語を道具として世界で活躍する人材、つまり「英語を武器にできる日本人」の育成が英語教育の到達点であるならば、「児童英語」と「中学英語」を分ける必要はないはずです。到達点を明確にし、あとは年齢に応じた言語材料と教授法を用いて、国際コミュニケーション能力を育成する活動を中心にレッスンを進めていくことが大切です。

## 本来、英語教育が目指すものは

このように考えていきますと、児童英語教育とは決して楽しいゲームとお遊戯の寄せ集めでは成り立たないことが明らかです。すべてのレッスンは1回ごとに完結するバラバラな点ではなく、はっきりとした目標を得るための過程の中にあり、それらは線で結ばれているべきなのです。

英語教育の到達点(destination)を、私が冒頭に書いたものであるとすると、自分の専門分野について、国際会議や学会で意見を述べ、討論する力が重要な要素であるこ

とが理解できます。そのためには英語の語彙力や文法能力が豊富であるだけでなく、考える能力、意見を効果的に言える能力、異文化を理解して受け入れる能力も必要です。

わが国の従来の英語教育の目標は、英語自体を学ぶことであり、文部科学省も英語を使ってコミュニケーションをする態度を養うことに留まっていました。したがって、中学・高校と6年間英語の勉強を続けているにもかかわらず、実際には大学受験以外には全く役に立たないものになってしまっていました。

専門書や、論文やインターネット上の情報の大半が国際語としての英語で書かれていることを考えますと、大学に入学してから実用英語を学ぶのでは遅すぎます。大学に入った時点で、英語を媒体として各国の大学生と社会問題や専門分野について討論できるようになっていかなければ、日本人はますます世界から取り残されていくでしょう。

### 従来の英語教育は…

ここで、英語の四技能とよばれている reading, writing, listening, speakingについて、その定義を再度考え、なぜ従来の英語教育ではいけないのかを考えていきましょう。

speakingの行為(speech act)はJ. L. Austinによると、①音声的、形態的、統語的、意味的に整った形の発話をおこなう行為、②発語という行為によって、話者が自分の意図を伝えるという行為、③発語行為によって、聞き手が影響を受けるという行為の3つから成るとしています。

しかし、従来の英語教育では、①を重点的に教えたために、話者の意思を伝えたり、聞き手に影響を与えるという②、③が欠けていました。“How are you?” “I’m fine, thank you.” のようなダイアログを自分の体調を考えずに丸暗記するような、決められた文章や歌の暗誦だけでは、speakingの一部しか教えていないことになります。

本来、**speaking**は話し手の能動的な行為から成るもので、また、**reading**は、受験英語のような部分訳や穴埋めではなく、まとまりのある文章から情報を正確に得ることが重要になりますし、**writing**は客観的に記述する(description)、時間の経過を追って述べる(narration)、ものを定義する(definition)、効果的に自分の意見を表現(i.e. essay, report)する能力が必要で、決して書きかえや英訳だけではないはずです。また、**listening**の能力とは目に見えない情報を、聞く行為を通して自分の中で具体化し、理解し、正確に受け取ることを目指します。

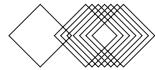
残念ながら、わが国の英語能力は国際的な英語能力検定試験であるTOEFLの成績で表すと、アジア25か国中からうじて最下位だけはまぬがれているという有り様です。

もちろん、言語形態も全く異なり、島国であるわが国の状況と、経済その他の交流も多いヨーロッパ諸国の状況を比べて教育の善し悪しを評することはできませんが、私達が認識すべきは、わが国の英語教育の結果、中学校・高校の現場の先生方の努力にかかわらず、その成績が過去30年間ほとんど変わっていないことです。日本の英語教育は「読み」「書き」に重点を置いてきたと言われていますが、その「読み」「書き」さえ、工学博士である志村史夫氏(1995)はその著書『理科系の英語』で、下記のように記されています。英語教育者は、この理科系からの言葉を真摯に受け止めなければいけないでしょう。

「日本の学校の英語教育は「読み書き」に重点を置いて来たのではない。もし、本当に「読み書き(少なくとも“読み”)」に重点を置いて来たのなら、6年間以上もそのような英語を勉強して“TIME”や“NEWSWEEK”を読めないはずはない。日本の学校の英語教育は、アメリカ人でもできないような難解、奇妙な「受験英語」の解答技術の鍛錬に重点を置いて来たのである。さもなくば、日本の英語教育に従事して来た人のほとんどは無能力者ということになる(「読み書き」に重点を置いた英語教育をしたはずなのに“TIME”もろくに読ませることができない現実を見よ)」(p.35)

「日本では遣隋使、遣唐使以来、外国の文化を吸収するために外国語を学んできた。外国の文化をそのまま取り入れるのではなく、外国文化の中から自分達に合ったものを一方的に取捨選択し、本来の文化と融合させて特有の文化を作り上げてきたといえよう。その際に必要であったのは、吸収型の言語であって、自らの意見や立場を相手に伝えるための言語は必要でなかった」と記していくのは鈴木孝夫氏です。外国語を自己表現の手段としての言語とせずに、文法、和訳、書き換え、語彙などを中心として教えてきた理由がここにあります。そして、コマ切れの、いわゆる内容のない文章の訳と、その分析にほとんどの時間を費やしてきた日本の現状が浮き彫りになってきます。鈴木孝夫氏は今後あるべき日本語教育についてその著書『日本人はなぜ英語ができないか』の中で次のように述べていらっしゃいます。

「したがってこれからは、何よりもまず日本人としての、自分の借り物ではない意見や考え方、外に向かって外国語で立派に言える人、日本に固有な事情を外国人に説明して、しかも相手を説得できる人を養成する、外向きで積極的な発信型へと重点を移す必要があります。これができる初めて、日本人は英語が上手だと言われるようになります。それと同時に、日本語で書かれた各種の情報をすばやくしかも大量に、いろいろな外国語に翻訳して海外に出せる体制を、国家としても、また大学とし



ても早急に整えることが絶対に必要です」(pp. 70-71)

同時に、英語は国際語となり、さまざまな分野における国際競争の手段として使われています。鈴木氏のお言葉を借りますと、

「スポーツの選手が相手に勝つための有効な戦術を必死で研究するのと同じで、相手との競争に勝つためにはどこをどう攻撃すればよいかの弱点を見つけることに重点をおいた研究が必要となります」(p. 79)

そして、鈴木氏は次のように締め括っていらっしゃいます。

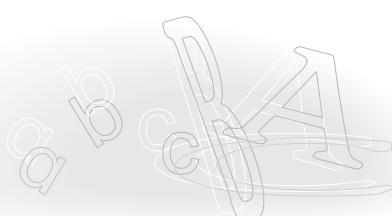
「さてこのような目標に向かって学生を指導できる外国語の先生が、いま何人いるでしょうか」

### 本書について

本書は、児童英語教育の目的を「国際的に活躍する人間の育成」とし、その手段の分析を通して児童英語教育の範囲で具体的に何をするべきなのか、何が無駄なのかを筆者が試行錯誤しながら長い間真剣に実践してきたことを具体的に形にしたものです。毎日、授業で子供達に接し、子供達1人1人が英語を道具として活躍できるようになることをひたすら望み、その都度真剣に悩み、考え、試行錯誤した30年間の経験を通して構築した「コミュニケーションの手段としての英語教育の理念と実践」をまとめたものです。「理論からの実践」ではなく、「実践から生み出された理念とその理念に基づいた実践集」だと言えるでしょう。コミュニケーション能力を育てる教育法をもう一度考え方直し、実践すれば、幼児・児童英語教育がただ単なる「英語での遊び」で終わることなく、日本の今後の英語教育の方向性を示唆するものになりえると信じています。

本書は、できるだけ平易な言葉を使い、具体例をつけて説明しましたので、経験の浅い先生から経験を積み重ねた先生までもが理解し、実践していただけるものと思います。

英語教育は「言語」の教育である以上、難しい言葉や解説に終始するのではなく、平易で、具体的で、そして日常的であるはずです。



#### 序章 引用・参考文献 .....

- 白畠知彦・富田祐一・村野井 仁・若林茂則(1999)『英語教育用語辞典』(大修館書店) p.285
- 志村史夫(1995)『理科系の英語』(丸善ライブラリー) p.35
- 鈴木孝夫(1999)『日本人はなぜ英語ができないか』(岩波新書) pp.70-71,79